



乳は出る 吸い手が二人 いるからね 双子も母乳で

自然妊娠で双子となった板羽かほりさん(初産)。早産の危機を何度か乗り越え、35週まで頑張って2人の女の子を出産しました。右側が第1子・那由(なゆ)ちゃん、出生時1656gしかありませんでしたが、写真の1カ月健診では2450gに増加していました。左側の第2児・望那(もな)ちゃんも出生時2024gから2816gに増えていました。



2人とも出生直後は小児科に入院となり、点滴等を受けていました。この間も板羽さんは、助産師のサポートのもと搾乳を頻繁に行い、そのお乳を2人に届けるとともに、母乳の分泌を維持していました。小児科の先生から許可が出て、直接吸わせ始めたとき、乳首はとても柔らかく吸いやすい状態になっていました。当初はミルクの補足も必要でしたが、吸われるたびに母乳の分泌が増え、早産+低体重児+双子でありながら、1カ月健診時までは完全母乳となったのです。

おっぱいは吸わせれば吸わせるほど出ます。双子の授乳は大変ですが、吸い手が二人いて代わる代わる吸ってくれるので、板羽さんのように最終的に母乳のみで育てる方も大勢います。このことは、母乳育児に頻回授乳がいかに大切かを教えています。

看護師長に早福久美子氏

はじめまして。これまでのB5(小児科)病棟から転任し、6月からA4(産婦人科)病棟の看護師長になりました早福久美子です。

私がこの「へその緒通信」に登場するのは、第29号(平成16年12月号)に次いで2回目です。当時私は産婦人科外来の副看護師長で、妊婦健診などに関わっていました。へその緒通信第29号は双子の特集号でしたが、実は私にも男の子の双子(プラス上に長男)がおり、その関係で載せていただきました。

早いもので、あれから6年半が経ちました。長男は高校3年生、次男、三男(双子)は中学3年生となりました。来春はダブルいやトリプル受験で少しあせっています。振り返ってみると、子供が小学校の頃が一番楽しい子育て期間のような気がします。

皆様にもまた接する事ができることを幸せに感じています。病棟でお会いする事があると思いますが、その時は、ぜひお気軽にお声掛け下さい。ご一緒に子育て談義に花を咲かせましょう。特に男の子に関しては、ポイントを心得ているつもりです。宜しく願いいたします。



へその緒 スックレビュー 「八日目の蟬」

最近映画化、NHKでのドラマ化もされて注目された直木賞作家・角田光代さん原作の「八日目の蟬」。母性の重さを哀切に描いたヒューマン・サスペンスを「へその緒流」に分析してみました。

【あらすじ】不倫相手の子を妊娠するも、中絶を懇願され、彼を失うのを恐れ同意してしまった希和子。術後の経過が悪く子どもを産めない体になる。その絶望から不倫相手と妻の子を誘拐し、いろんな女たちにかくまわれながら逃亡する。偽りの母娘でありながら希和子は真実の愛を娘(薫=実の名は恵理菜)に捧げ、小豆島の美しい自然の中で薫は健やかに成長していく。薫と



「金麦」のCMでもお馴染み、壇れいさんの未来を夢見た希和子だったが、逃亡生活はついに4年で終わりを告げる。20年後…恵理菜は妊娠するが、その相手もまた家庭を持つ男だった。恵理菜は育ての母を想いつつ小豆島を旅する。

ポイント① 子どもを育てるのは価値ある仕事だ

薫を誘拐した希和子でしたが、ミルクの与え方も分からず、おむつの交換、そして夜泣きと当初は苦労が続きます。原作では子育ての大変さ(喜びも)がよく描かれています。もし希和子が助産師で、すいすい育児をしたら、少し違う展開になっていたかもしれません。

ポイント② 人工妊娠中絶は怖い

中絶手術の後の経過が悪く、原作では子宮内腔癒着症、TVドラマでは骨盤内膿瘍になったとされています。前者は子宮鏡処置によって妊娠も可能ですが、希和子がもう子どもが産めないと思っただとなっています。後者のTVでは子宮が摘出されたようです。稀ではありますが、中絶も一歩間違えると怖いものです。

ポイント③ 生みの母より育ての母である

希和子の薫に対する愛が、ひたすら与えるだけの無私で純粋なものであることは、原作からもドラマからもよく伝わってきます。成人した恵理菜も育ての母が犯罪者であることに苦悩しながらも、その面影を求めていきます。産むことも重いですが、愛情かけて育てることはそれ以上です。それにしても、希和子が捕まって薫と引き離される時に言った次のセリフは凄い。真の母性がそこにあります。「待って下さい、待って、その子はまだ○○○○○○○○○○○○○○○○！」

角田光代さんといえば、「**予定日はジミー・ペイジ**」もおすすめです。妊娠中(予定日が1月9日でジミー・ペイジの誕生日と一緒に)の心と身体の微妙な変化を描いたマタニティ小説です。すごく記述が具体的なのに作者自身の体験でないのが驚きです。「私自身は出産しておりませんので、どうぞ、お祝いは送らないで下さいまし」だそうです。印象的なのは、居酒屋で胎動を初めて感じたシーンです。「ぎゃあっ」私は思わず叫んだ。店内が一瞬静まりかえる。客がいつせいに私を見る。どうかしたかと夫が必死の形相で訊き、どうしましたと茶髪にピアスの店員が訊き、どうしたって？ゴキブリでも入ったとか？ やだ、うそ、などと、客のざわつく声がゆっくり聞こえてきた。「いやあの、あの、あの」私は言った。「今、ごぼごぼって、赤ん坊が動いた」「えええっ」夫が叫ぶ。「まじっすか」なぜか茶髪店員も叫ぶ。恥かしくなつてうつむいた私の耳に雨の音が聞こえた。顔を上げるとそれは雨ではなくて店内にいる人々の拍手だった。